
蒼衣の神官

辰巳 結愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼衣の神官

【Zコード】

N7238A

【作者名】

辰巳 結愛

【あらすじ】

私は不死者にして女傭兵のルフィ。同じく不死者の神官ダルと共に旅を始めてから1週間になる。今回やつてきたのは食の街と謳われる小国、エッセントーイ。ところがこの国、現在は王宮内お家騒動の最中で…。謎が謎を呼ぶ「General and Priest」シリーズ第2弾！

第1章・神官、旅路にて（前書き）

この作品は「銀髪の悪魔」の続編となつております。この作品からでも楽しめるとは思いますが、できる限り「銀髪の悪魔」から読んで頂く事をお薦めいたします。

第1章・神官、旅路にて

「いい天気だねえ……」

食の街、エッセントーイに向かう途中の街道で、のほほんと私の隣にいた男が言つ。

海色の髪に同じ色の瞳。女の私でも羨ましいと思つくらいの美貌。白地に青い色糸の縫い取りは、海を司る神、「華麗の神」に仕える神官である事を示す。

彼の名前はダル＝ブリース。本当はトップクラスの神官でありながら、今は私と共に旅をしている。

「ほんなにいい天気だつて言つのに、何も食べられないのは辛いね……。」

……ふぢ。

「この男はああああっ！」

「この状況に陥った原因はあんたでしょうが……何でいきなり財布を落とすかなあ！？しかも私の財布まで……」

「……神の気紛れって事で。」

「なんでも神のせいにすれば許されると思つてんの？え？」

「私の目が怖かったのか、ダルはうつと小さく呻き……」

「いやほら、僕らはしばらく食べなくとも何とかなる訳だし……」

「……1週間を『しばらく』と言つて切るあんたに、殺意すら覚えるわ……。」

「残念だつたねルフィ、僕を殺せなくて。」

……いつか絶対のめす。

そう心に固く誓い、私は黙つて歩を進めた……。

私の名はルフィ＝ジェネル。腰まで伸ばした銀髪に、光の加減で蒼とも灰とも見える瞳。竜の皮で作った軽装鎧を身に纏う、旅の女剣士……って言うか傭兵である。

ダルとはほんの少し前、ある事をきっかけに知り合い、そのまま旅をする事になつたのだが…まあこれが世間知らずで。困つた人がいれば即寄付するわ、何かの手伝いを頼まれれば無償でやるわ…おまけに財布は失くすわで。こいつを旅に誘つたのは軽率だつたと今更ながら後悔している最中である。

「エッセントーイに着いたらまず仕事。何とかしてお金稼がないと、この先ひもじい思いしつぱなしよ。」

「そりだなあ、いくら僕らが不死者とは言え、これ以上は流石にちよつとい。」

…そうそう、言い忘れてたわね。私とダルは、何らかのきっかけで「死ななくなつた者」。すなわち不死者である。

私は2000年ほど前にそういう体になつた。ダルがいつからそうなつたのかは知らないが、彼も不死者暦は長そうである。「でもルフィ。仕事なんてそう簡単に見つかるとは思えないんだけど。まして傭兵を雇うようなものなんて。」

…まあ確かに、それはちょっと不安なんだけど。

「…せつかくの食の街なのに、そこ素通りつて…辛くない?」

「……辛いです。」

「でしょ?今の季節ならおいしいシフ料理にありつけのはずだから。何としても仕事しないと、ね。」

「りょーかい。その辺はルフィに任せるとよ。」

「こり笑つて、私達2人はエッセントーイへと向かつた。

第2章・旅人、食の街にて

食の街、エッセントーイ。「街」と言われているが、実際は国王が治める小国家である。故にこの街には「シティ」が付かない。一つの通り、ここは食文化が非常に栄えており、季節を問わず何らかの名物料理にありつけるため、かなりの観光客でにぎわっている。…のが普通なのだが。

「…何か…静かだな。」

ダルの言つとおり、今のこの街は活氣がない。観光客と思しき人はまばらで、どの店もほとんど閉まっている。

「…あんたたち…旅の人？」

「え、あ、はい。そうですけど…」

近くにあつた店の店主さんだろう。上官ron姿のよく似合つおっちゃんが、私達に声をかけてきた。今のこの街同様、元気がない。どことなく疲れている感じが漂っている。

「悪いねえ…今、この国はごたついてるから、商売どころじやないんだよ。」

「…はあ。」

すみません、今お金ないからそもそも食事ができません。

心の中で詫びつつ、おっちゃんの言葉に適当な相槌を打つ。その刹那。

ぎゅうううううう。

情けない音が響く。

「す…すみません！…ここ一週間、何も口にしてへんから…鳴つてもうたんです。うわ、僕恥ずかしい！」

音の主…ダルは恥ずかしさからか、『まかすように変なアクセントで弁解する。

彼は、気が昂ぶるとこんな言葉になるのだそうだ。

「そりゃ大変だ。…賄でいいなら、今すぐご馳走できるよ。」

「あ、いえ。私達今無一文で…」

「なお更！この街のモットーは、『楽しい食事を届ける』だ。無一文だろうが何だろうが、餓えている人を放つておく事はエッセント－イに住む者の恥！」

言つが早いが、おっちゃんはダッシュで店に入り、奥でなにやら作り始めていた。

「…いやあ…ええ人やんなあ。」

达尔も誘われるようにおっちゃんの後を追つて店に入る。慌てて私も店に入り、そして見た。

さっきまでの疲労感はどうへやら。鍋を振るうおっちゃんの顔は、明らかに生き生きとしていた。

店の中に良い香りが漂つ。香草の醸し出す香りだらう。香りだけでも満腹中枢を刺激されているような気がする。

「お待たせ。残り物のシフの身を使ったチャーハンだ。」

「ありがとうございます。」

感謝の気持ちを表し、出されたチャーハンを一口頬張る。

「おいしそう！」

「うまっ！」

私と达尔が、ほぼ同時にいった。

あまりのおいしさに思わず思考が一瞬停止したし。

「シフて僕初めて食べたけど、こんなにあつさりした魚やねんな！」

「シフはこの時期産卵を終えて、余分な脂が落ちて旨くなる。だからこの時期が旬なのさ。」

「それにこの香草…何を使っているんですか？はじめての味わいですけど。」

「ああ、それはブレハだよ。」

「ブレハって、あの野草…？」

ブレハ…どこにでも生えている野草であるが、それゆえに苦味も強いし香りもない。

それが……調理法一つでこんなにも爽やかな風味を醸し出すものになるとは！

「IJの街……いや、この国の人間は、どんなものでも最高の食材として扱う。そのための研究だつて惜しまない。」

「……食の街、と呼ばれるだけの事はありますね。」

「まあ、一番の喜びは、客がおいしそうな顔で自分の料理を頬張つてくれるのを見ることだけだな。」

にこにこ笑いながら、心底幸せそうにおっちゃんが叫ぶ。

だが、わからない。

正直な話、この街が寂れたように見えるのは、料理の質が落ちたからだと思つていたのだが、そういう訳でも無をもつてある。

では、何が……？

「……今、この国はお家騒動の最中にあるんだ。」

ぼそりと、おっちゃんが呟く。

「第1王位継承者のツニル殿下と、第2王位継承者のダッシャー様、そして第3王位継承者のカンヅ様。この3人が、互いに護衛を雇い、牽制しあつてゐる。」

「ふうん……」

「ツニル殿下はまだマシな方さ。王宮にいるだけなんだから。けれど残りのお2方が……」

「表に出て、目に見える形で争つてゐる……と？」

私の言葉に、おっちゃんはこくんと肯いた。

成る程。確かにお家騒動真っ只中の場所に観光に来るほど、命知らずな事はない。

「ルフィイ。……何考へてるか当てようか？」

「どうぞ。」

「王位継承者の内の誰かに雇われようと思つてゐる。」

「ちよつとはずれ。」

いたずらっぽい笑みを浮かべ、私はダルに宣言した。

「誰か、じゃない。ツニル王子に、雇つてもらおうと思つて。」

第3章・将軍、王宮にて

現国王の第一子にして、この国の第1王位繼承者、ツール。

年は20代前半か。漆黒の髪に、意志の強そうな目、何より威厳と温厚の両方を兼ね備えた人物である。「王」たる威厳を持ついると、私は直感した。

「…まさかいきなり押しかけて会えるとは思つてもみなかつたんだけど。」

「それも僕の人徳ってことで。」

城にいきなり押しかけて、門番にダルが顔を見せただけで中に入ることができた。

簡単に謁見できたつて言つのは、ちょっといただけない様な気もするんだけど…

て言うか、城に顔パスで入れるダルつて一体…

「顔を上げてください。そんなにかしこまられると困ります。」

私の疑問をよそに、心底困ったように王子は言つた。どうやらこの王子、なかなかの好人物のようだ。

「お久しぶりです、神官ダル。2年振り位ですか。」

「はい。それくらいになりますね。」

「それで今は旅の神官…あなたらしいです。とても。」

にこやかな笑みを浮かべ、心底嬉しそうに王子が言つ。

「それで、僕の…というかこの王国の危機を知つて、僕のところに駆けつけた…そう解釈してよろしいんですか?」

「ええ。そう思つていただいて結構です。」

嘘くさいまでににこやかな笑みを浮かべ、ダルは王子の問いに答える。

それを聞くと、やおいら王子は彼の後ろに立つていた少年に何事か話しかける。

どうやら彼の警護役らしい。しかしどう見てもまだ15、6の子

供。柔らかそうな金髪をいじりながら、事の成り行きを見守りつつしているようだ。

「神官ダル。あなたの好意を素直に受け取らうかと思います。…ラギスも納得してくれているようですし。」

「殿下が信頼されている方です。僕も信用させていただきますよ。」

ラギスと言づらしい。につこり笑いながら王子の言葉を継ぐ。

「まあ、どれほど人間が策をめぐらせようと僕には勝てませんが、護衛は多いに越したことがありませんし。」

フフンと鼻を鳴らしながら、ラギスは自慢げに言つ。しかもちらと見下し目線で。

……つて、あれ…？

「『『どれほど人間が策をめぐらせようと』…。まるで、君が人間では無いかのように聞こえますが?』」

同じ事を思つたらしく、ダルが睨むようにラギスを見つめる。ダルは見ただけで相手が人間か否かを理解する事ができる。最初に出会つたときも、私のこと不死者つて見抜きやがつたし。流石に強力な力の持ち主…神とか魔王とかまでは無理みたいだけど。

「ええ。ラギスは人間ではありません。ドラゴンなんです。」

……はい？

王子があつさりにつこりと衝撃的な事をのたまつた。

ドラゴン…一般的には竜族と呼ばれるもので、人間より遙かに高い知性と体力、そして長い寿命がある。長いと言つても、せいぜい300年かそこらなんだけど。

どちらかと言づと、竜族は神に近い存在なので、一般的には悪魔退治人をしていると言われているが…それが、あの少年?

「うわ、本当だ。」

ダルも小さく呟いた。

どうやらラギスという少年が竜だと言つのは、事実らしい。

「そう言つ事です。だから僕、足手まといにはならないと思ひます

よ。」

謙虚な姿勢で物を語つラギス。しかし相変わらず見下し目線であることに変化はない。

それを察したのか、はたまた単に忘れていただけなのか、王子は私を見て思い出したように問いかける。

「そうだ、あなたの名前を聞いてなかつた。」

「ルフィ＝ジエネル。現在はダルと共に旅をしている傭兵です。」

「そうですか。では…報酬は後払い。契約期間はこの一件が片付くまで。なお、食事と部屋はこちらで用意しておきます。」

事務的な事を述べた後、王子は再び温和な笑みを浮かべ…

「ラギスに案内させます。今日はゆっくり休んでください、お2人とも。」

何もわかつていいないのか、それとも策士なのか…自分の護衛に新しく入った護衛を案内させるなんて…大丈夫なの?本当に。

「…」がダルさんの部屋、でもって、その向かい側がルフィさんの部屋です。」

ラギスに案内され、私達の寝床を見る。どうやら密室の一つの1つらしく、一介の兵士が泊まるにしては随分と豪勢である。

用意された紅茶を入れ、私は近くにあつた椅子に腰掛ける。

「あの…ルフィさん。」

「何ですか、ラギスさん?」

おずおずと声をかけてくるラギスに、私は極力にこやかな笑みを浮かべて返す。

さつきの見下し目線ではなく、今はなぜか怒られるのを待つ子供のような雰囲気である。

「あなたは、その…『海将軍』様ですよね。」

「…その2つ名を知つてるつて事は…あなた、黄金竜?」

「はい!」この城にいらしたときから、海将軍様なんじやないかって思つてたんです!100年振りにお会いしたから、僕の記憶が間違

つてるんじゃないかなと思つてハラハラしました！」

15

ラギスの台詞に、たまたま飲んでた紅茶を吹きだすダル。

いや待て。何でここで吹くかな。この神官は。

「あー…君はルフィの知り合いなのか?つて言つたルフィが不死者

だつて事...「

「はい、もちろん存じています！今から100年ほど前にルフィ様

は、僕たちドラゴン種族と共に戦つておられた『海将軍』だつたん

ですか！」

海將軍
？

ダルが不思議そうに咳く。

100年位前に海の方に巨大な魔物が現れて、それをたまたま出

竜族から「えられた称号が「海將軍」だったようだ。

「今でも竜族の中では語り継がれています。海将軍様の、ドラゴン

て不死者!! 幼かつた業ごと、とて毛憂しくして預か

そういうやうなわねえ、敷しく寝てた子供の聲

普通竜族つて、人間を軽蔑してる。まして不死者など穢れ以外の

何者でもないのだから懐くなどまああらへない

「これがで……よじて……うるさいが」たのじら
「ハ」レフイの「『魔界圖』評ばれ」らつ。

私の回想をよそに、意地の悪い笑みを浮かべて言うダル。

「だつたら、何？」

いや、僕が海神官で君が海將軍。同じ海つながりでいいなあと思

二二

和む!!。
一海神宮。だから貴方からはこんなに清々しい氣かするのか。

ダルの
飛騨

ダルの隣に座り、何かほんわかしてるラギス。
なんと言つか…あまり、お家騒動っていう緊張感がないのは…

気のせい？

第4章・魔道士の長、謁見の間にて

「さて、程よくまつたりしたところで。早速護衛任務に入るわよ。」

未だまつたりムードな2人に活を入れ、雇い主であるツール殿下（王宮内では「王子」ではなく「殿下」と呼ばなければならぬらしい）の元に向かおうとし…

「あ、ちょっと待ってくれ。」

「…何？」

「さすがに王宮内では、正装の方が良いだらうからね。」

ダルはそう言つと、「じそこそと荷物をあさり、その中から一着の法衣を取り出した。

海のような蒼を基調としており、所々、派手すぎない程度に金糸の刺繡が施されている。

…カラーローブ。この世で高位神官のみが纏う事を許されている法衣。しかも金糸での刺繡が施されているといつ事は、最上級の神官…教皇か神官長である証。

…いや、カラーローブ持ちの高位神官だつて事は知つてたけどさ。まさかそこまで高い位を持つてたとは思わなかつたわよ。

「うわあ…。」

ラギスが感嘆の声を上げる。私に至つては声も出ない。

髪も瞳も青い彼が、蒼の法衣を纏うことで完全に蒼一色。以前悪魔たちがダルのことを「蒼神官」って呼んでたけど、その表現に納得してしまつ自分がいる。

いや、カラーローブを纏つた人間つて言うのは今まで何度も見たことあるけど、ここまで似合つてる奴は見たことない。今まで見てきた連中は、「着ている」と言つより、「着られてる」感が強かつたし。

「どうだろう?」「

まるでお気に入りの服を見せたがる子供のように、ダルはその場

でくるりと一回転してみせる。

法衣の裾がふわりと舞つて、まるでドレスのようだ。

「…むかつくくらい似合つてるわよ。自信持ちなさい。」

「ありがとう、ルフィ。」

照れ笑いを浮かべつつ、ダルが素直に礼を言つ。

「ほら、いつまでもボーッとしてないで。さつと行くわよ。」

「え、あ、はい！」

惚けた様にダルを眺めるラギスを促し、私達は殿下の元に向かつた。

「ああ、皆さん。一度良かつた。」

殿下のもとにつけや否や、いきなり彼はにこやかな笑みを浮かべてそんな事を言い出した。

よくよく見れば彼の隣には、貧相な顔に似合わない鬚を蓄えたおつさんが立っている。格好からすると富廷魔道士の類だろうか。少なくとも服装には旅をするもののような身軽さは一切ない。

「こちらは富廷魔道士の長で私の叔父のカンヅ様です。」

「あつれー？ カンヅって確かに第3王位継承者では？

そんな人と2人つきりで会つて平気な訳？ 仮にもお家騒動の真つ最中でしょ？

「ラギスの事はご存知ですね。あちらの銀髪の女性がルフィさんで、あの蒼衣の神官が以前お話したダルさん。」

「おお、いつもや殿下のお命を救われた…！ あなたが…！」

心底感動したようにカンヅはダルの方を見つめる。

つて言づか待てこら。そんな話、私初耳なんですが。

…いやまあ、聞かなかつたつて言うのもあるけど。

「しかしお若…。そのお年でカラーロープを纏える立場にいるなど…さぞやご苦労なさつた事でしょうな。」

「いえ、それ程でもありません。」

そりゃそうよね、ダルも不死者だもん。

まあ、その事実を知らない人からすれば驚きだけど。…事実私も知らなかつた時はカンヅと同じ反応したし。

「時に殿下。殿下が暗殺者に襲われかけたといつ噂は眞実でござりますか？」

ちょっと待て。

「ええ。ラギスが撃退してくれましたが…それが何か？」

さりに待て。

暗殺されかけただあ？聞いてないんですけど！

「殿下の暗殺など、由々しき事態ですぞ！それを暢気に構えておら
れて良いのですか！？」

「未遂に終わつているのですから良いではありますか。」

「良くありません！早急な対処をなさるべきです。」

「例えば、暗殺者の雇い主は誰か…とかですか？」

ヒートアップしてきているカンヅとは対照的に、冷静な言葉で返すツール殿下。

…カンヅは、心底ツールを案じて見えていた。これが演技だつたらかなりの曲者なんだけど。

「私は殿下に何かあつたらと思つと心苦しいのです。陛下のたつた一人のご子息なのですから。」

「私が死ねば、王位継承権は自ずと繰り上がりますね。」

にこやかに言い放された言葉に、カンヅは曇然とした表情を見せた。

いやはや。そこであつたりとそういう事をのたまうつて辺り、この殿下は曲者よねえ。巷の噂を知つてゐるのかしら、この人。

「んな…何をおつしやいます！確かに私や次兄のダッシャーにも王位継承権はござりますが…王座を望んでなどいない事は、殿下もご存知のはずです！」

「何、一つの物の見方ですよ。本当に叔父上たちが私を暗殺する気なら、ラギスたちが来る前に殺しているでしょうから。」

顔を真つ赤にして否定する相手に、相変わらずにこやかな顔のま

ま返す殿下。

「世間では、カンヅ殿とダッシャー殿のお2人が王位継承権を巡つて争つていて迷惑だ、と言われておりますが？」

横から口を出したのは、意外にもダルだった。

まあ確かに、その辺は疑問だったんだけど…いきなり口を挟むかなあ。

「私と兄上が…？争つている…？」

「ええ。その噂が他国にまで広がつており、現在この国に観光に来る者がめつきり減つた、と。街の方がそつおつしゃつてましたか？」

「馬鹿な。陛下を含む我ら3兄弟、この国の発展させるための討論はするものの、争つなどと言つことは決してない！」

ダルに言われ、心底不思議そうな表情になるカンヅ。

どうやら本氣で心当たりがないらしい。

もちろん、「争つてますか」と聞かれて「はい、争つてます」なんて馬鹿な答えはしないだろつけど…それでもなにやら妙である。

…まあ、ここにはいないダッシャーとやらの意見も聞いてみないと何とも言つ難いけど。

「とにかく…私は殿下や兄上と争うつもりはない。今まで十分なのです。それをご承知願いたい、神官殿。」

心底困り果てたような第3王位継承者に言われ、それ以上追求する気をなくしたのか、ダルはその場で黙り込んだ。

はてさて。お家騒動つていうのは、本当に存在してゐるのやら…。

第5章・継承者、集いて

「随分と楽しそうですね、殿下。」

「何…？」

私達の後ろ…言つてしまえば出入り口から、唐突に声が上がった。出てきたのはカンヅと同じくらいの年の中年男。神官なのだろうか、やたらと長い法衣を床に引きずりながら恭しい態度でこちらに…と言うか殿下に向かつて歩いてくる。

「…ラギス、あれ誰。」

「第2王位継承者にして、宫廷神官長…ダッシャー。」

「ああ…。」

貧相なカンヅとは対照的に、神官の割には背が高く、引き締まつた筋肉が長身の男性特有の「大男」と言つイメージを持たせない。体格的には「神官」よりも「戦士」や「傭兵」に近いんじゃないかな…。

「」機嫌いかがですか、殿下。」

「そうですね、王宮の危機の原因がわからぬ以上、良いとは言い切れません。」

言葉に相応しくないほどにこやかな笑顔で殿下は答える。

……何だろう、ダッシュヤーが来た途端、異常なまでに気持ち悪くなってきたんだけど。

何で…? こう、真夏に生ゴミを3週間ほど放つといった様な、生臭い空気が漂つてる気が…

「どうした、ルフィ?」

「…空気が悪い。」

「そつか?あまり僕にはわからないが…」

余程私の顔色が悪かつたらしく、小声で問いかけるダル。どうやらこの空気の悪さを感じしているのは我だけらしく、ダルもラギスも平然とした様子である。

「時に殿下、見慣れぬ者が2名ほどおりますが。いやつら一体何者で？」

「殿下の新しい護衛の者だそうですよ、兄上。しかもそちらにおわす神官殿は、かつて殿下にかけられた呪いを解除なさったあの……」

「……ああ、神官、ダル様でござりますか。」

「呪い…？」

「呪いつて、何それ。」

「知らないか？他人を恨んだり妬んだりする気持ちを呪文やら何やらで具現化させたものを…」

「いや、言葉の意味じゃなくて。殿下にかけられた呪いの事よ。つていうか言葉の意味くらいは私も知つてるつづーの。」

「本気なのかボケなのかは知らんが、人の質問に真面目に答えろつづーの。思わず短剣抜いてダルの喉元に押し当てちゃつたじやないの。」

「ああ、僕と殿下が顔見知りなのは知つているだろ？昔、殿下に石化の呪詛がかけられていてね。それを解除した事があるんだ。それよりルフイ、怖いからそれしまつてくれ。」

「ふうん…」

呪いの類にはあまり詳しくないからよくわからないけど…命に関わるような呪詛って、相当ハイレベルなもののはずよね。

「あの時の犯人もまだ捕らえられていない。その上殿下の暗殺疑惑。この国は今、大変な混乱に落とされています。」

「確かに、ダッシャー叔父上の仰るとおりですね。」

「その混乱に乗じて、他の国家がこの国へ攻め入ろうとしていると
言つ噂まで持ち上がつております。」

……お家騒動って話は聞いてたけど、そんな戦争直前だつて話は初耳ですが…？」

徐々にヒートアップしてきたのか、ダッシャーの呼吸が荒くなつていく。声も大きくなつてきてるし。

「ですから、私は今一度申し上げます。この国の警備を、兵力を！

更に充実させるべきであると…」

兄弟そろって、熱くなりやすいのね…。

「王宮の危機とは即ち！他国からの侵略に他なりません！わが国を敵に回す恐ろしさを、今こそ他国の愚民共に知らしめるべきなのはありますまいか、殿下！」

かなりアブナイ人ね、この人。なまじ、中途半端に権力を持つてるから…」うこうう考えに行くんだろうけど…

「あ、兄上！いやダッシャー殿下！その考えはいささか早急すぎるのででは…」

「黙れカンヅ！貴様も魔道士共の長ならば、これ位の事を考慮せずにどうする！」

「まだ確証が得られておりません！今いたずらに兵力を増やしては他国との関係が悪化する事は必至！」

「確証が得られてからでは遅いのだ！それとも貴様、陛下や殿下が殺されてからでも良いと言つのか！？」

「め、滅相も無い…決してそのような事は…」

…あーうるさい。よくまあこんなやかましい中で笑顔でいられるわねえ、殿下。何かラギスも平気そうな顔してりし、ダルに至つては聞いて無いふりしてゐるし。

「…あんた、こんなにやかましいのによく平氣ね、ラギス。」

「慣れました。」

「慣れるほどやつてるんかい、この2人…」

…何となく、お家騒動の正体は掴めてきたわね。

街中で2人がこんな議論をしているのか、はたまたこの様子を見た誰かが勝手に「お家騒動だ」と思い込んで吹聴したか…そんな所だろう。

「神官殿！貴方はどう思われますか！」

「…へ？僕？」

いきなりダッシャーに話題を振られ、一瞬呆けたような表情を作るダル。よくよく見ると口の端によだれが…

……寝てやがったな、あの馬鹿神官。

「あ、スイマセン、展開が速くてついていけませんでした。もう一度仰っていただけますか。」

「ですから、この国の兵力増強についてです。貴方の『』意見をお聞かせ願いたいのですよ、神官殿。」

問われてダルは、物凄く困ったような顔になつた。

「僕は神官です。できれば争い事を避ける方向に持つていきたい、とお答えするしか…」

ぱりぱりと頬をかきつつ、できるだけ当たり障りの無いように答える。

まあ確かに、平和を愛するとされている神官が、「戦争しちゃいましょう」なんて言おうものならかなり問題あるし。ましてダルつて、高位神官だし。忘れがちになるけど。

「……わかりました。ではこの話はまた後日。殿下、何卒御一考の程を。」

さつきまでのヒートアップぶりははどうやら。苦々しい口調で述べてから、恭しい態度で一礼しダッシャーはその場を立ち去る。

「…私もこれにて失礼いたします。何かございましたら殿下、御連絡を。」

怒鳴りついで気まずくなつたのだろう、カンヅもダッシャー同様にして部屋を後にした。

…取りあえず、嵐は去つた…かな。

「ダッシャーさんて、かなり危険な考え方の持ち主?」

「いえ、そうではなく…ダッシャー叔父上の所には、僕の所以上に暗殺者が送り込まれているようですからね。神経質になつておられるのでしょうか。」

…ラギスに聞いたつもりだったんだけど、殿下に笞えられりやつたなあ。

でも、いくら命狙われたからって、あんなに端的に戦力増強を求めるものだらうか? ましてやダル同様、の人も神官なのに。

まあ、何事も例外つてものは存在するから、あの人は戦争好きな神官なのかも知れないけど。

…どうも私には、今回の黒幕がダッシャー神官長のような気がしてならないのよね。

第6章・神官長、寝室にて

「なあルフィ、もう一度あの一人と会わないか？」

「…あの二人つて、ダッシャーとカンヅ？」

夜も更けて、殿下の寝室前で警備をしている時だった。唐突にダルがそう言つたのは。

ちなみにラギスは寝室の中で警備中。

「あの二人…どちらかは、悪魔だ。」

……
「ここので悪魔つて言つた単語が出てくるのか。今日は無いと思つて安心してたのに。大体…

「あんた、悪魔なら見ればわかるんじやないの」

「普通の奴は、な。しかし高位の悪魔になるほど、人間に化けるのがつまくなる。今回の奴はそういうた類だ。」

そういう話は、昔聞いた事がある。400年くらい前に起こった戦争も、元々の原因是人間にうまく化けた悪魔が、王を唆して起きたと語り尊もある位だ。

「昼間、彼らが出て行くときに微かだが悪魔の気配…瘴氣を感じたぶん…」

「…成り代わり…？」

「そう。その可能性が高い。」

「じゃあやつぱりダッシャーじゃないの？頻繁に暗殺者に襲われてるつて言つし、何か兵力増強を強く推してるし。」

自分の考えを述べつつ、隣にいるダルの顔を覗き込む。
随分と真面目に考え込んでるんですけど、この男。って言つた、

カンヅも怪しんでるつていう理由がわからないのよね。

「400年前のケースではね、ルフィ。一番怪しくなかつた人が、悪魔だつたんだ。」

「…よく知つてゐるわね。」

「当事者だったからね。ちなみに当時の僕は王宮神官の一人だったんだ。」

ダルは無意味に胸を張り、自慢げに話す。

いや、別にそこで威張られても。別に王家に仕えてるから偉いつて訳でもないし。

「で、それを踏まえるとカンヅも怪しいって事?」

「そう。一応、殿下もかなつて思つたんだけど、竜族であるラギスの目を誤魔化し続けられるとは思えない。」

「なるほど。」

「だけど…どうやって悪魔と見抜く?ダルですら見抜けないといつのに、私にはとてもじゃないけど無理。尻尾を出すまでひたすら待つって言つのもアリだけど、それでは時間がかかりすぎる。」

「相手が悪魔…しかも高位な奴なら、必ず尻尾を出すはずなんだ。」

「ある方法を使えば、ね。」

「私の考えを見抜いたかのように、ダルがにこやかに私に言つた。」

「…と、言つわけで早速行つてこよ。」

「ちょっと待て。今すぐに行くの?こんな夜中に?」

「今なら確実に寝ぼけてドジを踏む。…と思つんだけど。」

……悪魔つて寝ぼけるものなのだろうか。むしろイメージとしては悪魔つて夜に強い感じがするんだけど。

いや、それ以前にアポ無しで行くと間違いなく見張りの兵とかに邪魔されるような気が…

「ラギス、殿下の事頼んだよー。」

『了解です。』

扉の向こうで聞いていたらしく、唐突なダルの呼びかけに応えるラギス。

しかも何か楽しそうな声してやがるんですけど。

『もし、悪魔が見つかったら呼んでくださいね。僕も警備の一人なんですから。』

「はいよー。期待してくれていいと思うよ。」

「軽やかに約束すんな！無事に会えるかどうかなんてわかんないのよー？」

「ああ、その点は大丈夫。」

「私の心配をよそに、ダルはにっこり笑つて…

「アポは、取つてあるから。」

……………ここ…こつの間に…！？

「夜分遅くに申し訳ありません、ダッシャー殿。」

「いえ。私もまだ疲れそうにありませんでしたから。」

「まず最初にダッシャーの部屋。」

流石に富廷神官の長なだけあって、部屋の内装は至つてシンプル。神学関係の本が本棚にぎっしりとつまれており、どれも読み古されている感がある。

所々に獅子を模した置物がおいてあるとこを見ると、この国はどうやら大地の神である「灼熱の神」を祀つてゐるらしい。

「昼間は随分と見苦しいものをお見せしてしまいました。」

「いえいえ。この国のことについているからこそ、どのように熱気のこもつた発言ができると思っております。」

昼間とはまるで別人のように大人しいダッシャーをたてるかのようだに、ダルはいつも通りにこやかな笑みで返す。

そう言えば、昼間はこの人が来た途端に空気が悪くなつた気がしたけど…今は全く渾んでない。むしろ神官特有の澄んだ空氣すら感じられる。

……どうこう事、これ…？

「この言ひと言い訳に聞こえるやも知れないのですが…あの時は空気の悪さにも耐えかねていたのです。」

「空気の悪さ…？」

「ええ。お氣づきになりましたか？なんというか…すえた様においと、不快なほど重苦しい感覺…」

…あれ？この人、私の感じた「空氣の悪さ」を感じ取つてゐますます訳がわからない。

「僕は気づきませんでしたが…そつと詫えればルフィは、あの時『空氣が悪い』って言つてたよな？」

「うん。全く同じような感覚を覚えたわ。吐き気がするくらい、気持ち悪かった。」

…思い出しだけでも気持ち悪くなつてきたし。

「ところで神官殿、私に用、とは…？」

彼も同じなのか、それともこれ以上追及されではまずいのか。とにかくなにやら強引に話を変えようとしてきた。

…つて言つかそうよね、もともとはダルが、「用事があつて」彼に会いに来たんだもん。その用事が気になるのは当然か。

「いえ、ちょっとした私事なんですが…ダッシャー殿の、神官としての一つ名を知りたいと思いまして。」

…………はあ？

にじやかに、しかも今この場で言つ様な事じやないでしょそれ！つて言つか私たち確か悪魔の正体を掴みに来たのよね！？

「いえね、僕は知り合つた神官の一つ名を当てるのが趣味なんですが…ダッシャー殿の一つ名が、どうしてもわからないんです。ですから、お教え願えないと。」

いけしゃあしゃあとたまうこの青ずくめの神官に、ダッシャーもポカーンとした表情をうかべている。

「はあ…私は『土神官』と呼ばれております。この体格ですから、戦士でもあれ、という意味で…」

「やあ…なるほど…なかなかセンスと気品がある。僕なんかそのまんまですよ…」

「ど、言つと…『海神官』ですか？」

「正解です。ほらね、すぐに当てられてしまつてしまつへ…」
はははは、と爽やかに笑うダルを見やり、ちよつと…どこか、かなり引きまくつてゐるダッシャー。

…私でも引くもん、こんな変人。しかもそれが高位神官だつてあたりが更に引くし。

「いやあ、ダッシャー殿の一つ名もわかつたことだし。そろそろお暇しますね。」

よつこらしょ、なんて咳きつ立ち上がるダルを、相変わらずポカンとした表情で見つめるダッシャー。

それを無視して彼が部屋を出ゆつとしたとき…唐突に、ダッシャーの方を振り返つた。

「ああ、そうだ。これも聞いておきたかったんだ。」

「…なんですか？」

うわーい、ダッシャーをたつてぱうんぱうした表情隱そつともしない。

「あなたは本当に…兵の増員を望んでおいでですか？」

さつきまでのふぞけ顔はビリくやう。达尔の表情は今までにないほど真剣そのもの。

あまりのギャップに度肝を抜かれたのか、ダッシャーは目を大きく開け…やがて深いため息とともに言葉を吐き出した。

「…必要がないなら、それに越した事はないでしょ？？何しろこの国は『食の街』。…兵よりも料理に力を注ぐべきであると、考えてるんですよ。……本当はね。」

「……………ありがとうございました。それじゃ、行こうかルフィイ。」

「了解。」

…案外とまともなことを考えてる人だつたみたいね。

ただそれが…悪魔の演技でないと仮定するなら、だけど。

第7章・疑わしき者、執務室にて

ダルが何を考えているのかは知らないが、とにかく悪魔探し……と言つた正体を暴くために、今度は第3王位継承者であり、宫廷魔道士長でもあるカンヅの寝室に来た。

アポを取つていたとは言え、真夜中だと言つのに部屋の主は平然とした表情で私たちを迎えた。

「いやあ、ようこそ。夜中までご苦労様です。ダル殿、ルフィイ殿。『いえいえ。僕たちなんてぜんぜん苦労していませんよ。』なあ、ルフィイ？」

「そこで同意を求めるても、一応私、さつきから何かあつたときのためにずっと臨戦態勢整えてるから精神的に疲れてるんだけど。まあ、頷いてはおくけどね。」

「カンヅ殿もお疲れでしょから、单刀直入に伺いますね。」
にこつと笑い、ダルは何気なく近くにあつた宝玉に手をかける。
魔法なんかを使う道具なのだろう。ダルが手をかけた瞬間に淡い青色の光を放つた。

「……このオープで、悪魔の探知ができるって……ご存知でした?」「は?はあ……一応私も魔道士ですからね。それくらいは存じてありますか……まさか!」

「ええ。お察しの通り、この宮殿の中に……それも陛下に近しい者が、悪魔に成り代わられている。」

「そんな!では早速調べなくては!」

ダルに言われ、心底慌てた様にいい、カンヅは宝玉……オープつて呼んでたけど……に手をかける。同時にそれは光を放つのをやめた。
……なんで光らなくなつたんだ……?

「……私の魔力は微弱ですから、オープの反応も微弱なのです。」
うわ、心読まれた!?何で私の考えることわかつたの、この人!

「ルフイって、考えてる」ことが意外と顔に出るんだな。…それでよく傭兵が務まるな。」

「うつむい。」

戦つてるとときは表情に出れないようにしてるので、普段のときは気が緩むのよ！

「そんな事よりも、早く悪魔を探さないと！」

「そうですね、僕も蒼神官としてお手伝いいたします。」

「おお、それはありがたい！われら魔道士の間でも名高い蒼神官殿のお力添えを頂けるとは。」

…私、魔法に関しては専門外なんだけど。

第3の魔法たる混沌魔法は使えるけど、神聖魔法と暗黒魔法に関しては一般的な知識程度しか知らないし。

「…ダル、私帰るわ。何も手伝えそうにないし。」

ひらひらと手を振りつつ、私はその場でターンし歩き…出せなかつた。

しつかり、がっしりとダルが私の肩に手を置いている。しかも、かなりの馬鹿力で。

「何言つてるんだルフイ、君の仕事はこれからだろ？？」

「…はあ？」

訳がわからないまま、ダルの手を振りほどきもう一度彼らの方に向き直る。

「見つけた悪魔を退治するのは、君の役目じゃないか。」

…そりや、そうだけど。

「その悪魔が見つかったら声かけてよ。」

「だから。もう見つかつたって。」

…何言つてるんだこいつは。

訝る私とカンヅ。一方でダルは、探偵を気取っているかの？とく取り澄ました表情で立っている。

「だ、誰が悪魔なのです！？私もお手伝いさせて頂きます！」

近くにあつたのだろう、カンヅはちゃきりと杖・魔道士の場合は

ワンドって言うんだつけ？…を構え、かなりやる気である。

「いやいや。あなたのお手伝いは必要ありませんよ。僕とルフィで何とかしますから。あ、あとラギス君も。」

にこやかに魔道士長殿の申し出を却下し、ダルは錫杖を窓に向かへ何かの光線をその先から打ち出した！

当然、窓は割れるわ爆音は響くわ。おまけに今度はその錫杖の先をカンヅに向けるわ。

こいつ！何を考えて…

「な、何を考えておいでなのです、蒼神官・ダル殿…まさか、あなたが悪魔という話では！？」

うわ、すごい説得力。でも、ダルが今回の黒幕のはずがない。なぜなら今回の一件は、私達がこの国に来る前から始まっていたのだから。

…つて…ん？

「ダル、こんな時になんだけど。あんたの二つ名って確か『蒼神官』じゃなくて『海神官』じゃなかつたつけ？」

おまけにダルは「蒼神官」と呼ばれることを忌み嫌っている。以前悪魔に「蒼神官」と呼ばれた時、いちいちそれを訂正してた気が…「そう。僕の正式な称号は『海神官』。ダッシャーさんは一発で僕の二つ名…称号を『海神官』だとわかつただろう？」

「そうだったわね。私としては、『蒼神官』でも良いような気がするけど。」

「いけないんだよ。神官の称号に『蒼』、『紅』、『黄』を使うのは、魔王を連想させるから絶対にしないんだ。この事は神聖魔法の使い手…つまり神官や魔道士なら誰でも知っていること。」

ところが、カンヅはダルの鎌かけに乗つてしまつた。ダルが自分のことを「蒼神官」と言つたことで、それがダルの称号であると勘違いした。

そんな勘違いをするのは…

「そう。カンヅ。あなたが悪魔だ。」

「く…くくつ。まさかね。そんな事でばれてしまつとは思いませんでしたよ。蒼神官殿。」

どうやらもう隠す気はないらしい。悪魔特有の血色の眼球に金色の瞳をらんらんと輝かせ、カンヅは肩をくめた。

「この男に成りすまし、王家の人に間に不信感を募らせ、世界中に邪気を撒こうといふ私の計画。こんな所でダメになるとは。」

「悪いが、君を野放しにすることはできない。」

ダルが言うと同時に、私も剣を抜き払い、構える。

「一応聞くわ。…本物のカンヅはどうしたの。」

「決まつていいでしよう? 私は悪魔なのですよ、ルフィイ殿。」

「殺したのね。」

「恐怖という名の邪気を搾り取つて、ね。あれはなかなか美味でしたよ。」

…私は…この悪魔の演じた「カンヅ」しか見ていない。だけど、それでも…許せない。

「さて。予定とは大幅に違いますが…この国を、消しましょうかね。」

「何…?」

…一夜で小国とは言え、国が消える。…他国にとつたら、そりやあ脅威でしょうね。でも…

一拍おいて、私は相手に向かつて宣言する。

「そんなこと、させないわよ。…海将軍の名にかけて、ね。」

第8章・竜、戦場にて

…正体を隠す必要のなくなつたカンヅの攻撃は、冗談抜きでこの国を潰せるくらいの威力を持つていた。

今まで戦つてきた悪魔とは、明らかにレベルが違う。

…まあ、ダルが正体に気付けなかつた時点で、並の悪魔じやあないとは思つてたけど！

「どうなさいました、ルフィ殿？私を止めるのではなかつたのですか？」

くつくと嘲笑しながら、カンヅは余裕の表情で私に言つ。

しかし見え透いた挑発に乗つてやるほど、私も未熟ではない。伊達に2000年間生きている訳じやないのよ！

「普通ならその安い挑発に乗るんでしょうけど、生憎と私はそこで感情的な人間じやないの。」

「不死者ごときが、人間気取りですか？蒼神官もあなたも、人間からすれば我ら悪魔と同じ化け物だというのに。」

：そりやまあ、確かに。不死者と知られた事で何度も人に殺されかけたことはあるけど。

「だからって、人間に絶望してる訳じやないもの。大体、バレなきや良いのよ、バレなきや。」

「そうそう。……って、蒼神官つて呼ぶな！僕は海神官だ！」

余程蒼神官と呼ばれるのが嫌なのか、ノリツツ「ミミ的なタイミングで相手に反論するダル。

つて、今はそんな事言つてる場合じやないでしきつがつ！

「怒りの感情は、私に力を与えるだけですよ。『怒り』もまた、邪氣の一種なのですから。ね、『蒼神官』殿。」

くすくすと笑いながら、カンヅはダルの神経を逆撫であるようこの彼を「蒼神官」と呼ぶ。

つて言うか、蒼神官つて言つその単語に何か意味あるの…？

などと思っている暇も有らばこそ。ほんやりと考え込みそうになつている私に向かつて、カンヅはその伸縮自在の鉤爪を私に向かつて振り下ろす！

だが長年の剣士としての経験からか、無意識の内にその爪を剣ではじき返していた。

ほんやりしてゐる場合じやないつて私！まがりなりにも今は悪魔との戦闘中なんだから集中しないと！

「おや？隙だらけのように見えたのですが…？」

私の防御は予想外だつたらしく、カンヅは心底驚いたように言つた。

「一応、これでも傭兵なもので。殺氣に対しては体が勝手に反応するのよね！」

積極的に斬りこみつつ、私はカンヅができるだけ人のいない方へと誘導する。

王宮内とは言え、ここは宫廷魔道士の詰め所。死者を出さないでいる自信はない。

それに気が付いたのか、ダルの方も小技でカンヅを誘導していく。「いくら神聖魔法と言えど、この程度の術では私は倒せませんよ、『蒼神官』殿。」

「やがましわつ！その名前で呼ぶなつて言つてゐやうつ！」

何度も「蒼神官」と呼ばれた事に、流石に頭にきてゐらし。言葉のアクセントがおかしくなつてゐる。おまけに魔法のコントロールが少し難になつてきてるし。

一方で私は何度目かの鉤爪攻撃を防ぎつつ、全く威力の衰えない攻撃に戸惑つていた。

いくら小技とは言え、ダルの神聖魔法を何発も喰らつていながら全く効いていないなんて…どれだけ高位な悪魔なのよ、こいつは！

その時だつた。後方で、声がしたのは。

「ルフィさん！ダルさん！伏せてください！」

声に言われた通り、私とダルはその場に伏せる。とほぼ同時に私

たちの頭上を光の砲撃が通過し、カンヅに命中した。

今つて…「竜の息吹」！？つて事は今の声の主は…

「ラギス！」

「やあ、僕の合図、気付いてくれたんやね。」

驚く私とは対照的に、ダルは待つてましたと言わんばかりに黄金竜の登場を歓迎した。

「はい。あの砲撃のおかげで知る事ができました。」

「砲撃…？」

つてひょっとして。さっきカンヅの部屋で放った光線の事！？

「部屋一つ破壊するような合図つて…」

「何言うてるんや？あんなんまだマシな方やで。」

「あんた王宮を壊す氣か！？つて言うかあんなのでマシって、一体どういう性格してるのよ…」

「え…マシですよねえ？」

「マシやんなあ。」

ああああああああああ。竜と神宮の考えつて良くわからない…。わかりたくもないけど…。

「それにしても…カンヅ様が悪魔…しかも『デビル』だったなんて意外ですね。」

「…あいつ、『デビル』だつたの！？」

「せやつたら僕が見ただけでわからんかったのも、しゃーないなあ。」

「竜の息吹」のダメージが大きかつたのか、なかなか立ち上がらないカンヅに視線をやりながら言う私とダル。

デビルとは、数多きる…と思つ…悪魔の中でも、特に力の強い者の事を指す…のが一般的に知られてる事なんだけど、本当はそうではない。

デビルと呼ばれる種族は、普通の邪氣から生まれる悪魔たちとは異なり、3大魔王が生み出した存在のことを指すのである。

見た目は悪魔とほぼ同じだが、その力は桁違い。おまけに高位になればなる程、化けた時の姿は人間との区別が付かなくなる。

今回のカンヅが、その良い例である。だって、あのダルが見抜けなかつたんだから。

なんて思つてゐ間に、カンヅはようやくその場に立ち上がる。しかし：様子がおかしい。

いや…「おかしい」というのは間違つてゐる。明らかに今のヤツは変わつてゐるので。

…かつて戦つた魔王の分身もそうだったが、悪魔の類はある程度のダメージを負うと人間の姿であることをやめるらしい。

今や「カンヅ」は闇色の体をした、不気味な生命体へと変貌している。

「な…なんですか！？あれは…」

ラギスが、誰にという訳でもなく問い合わせる。

顔だと思われる場所には、目がない。耳も、鼻も、口もない。例えて言うなら黒い大きな卵が、頭になつてゐるような姿。

『私を本来の姿にしたからには、皆さんを…殺して差し上げましょう…』

地の底から響くよくな「声」で、カンヅはそう言った。

第9章・上級悪魔、IJの場にて

「確かに、見た目はおどろいた感じにはなった。だがしかし…『どうしました? テビルの姿が、そんなに珍しいですか?』

ぽんやりと突つ立っている私たちを見て、カンヅが嘲笑する。

ダルとラギスはどう思つているのかは知らないが、私はこの「テビルに、なんとなく妙な違和感を覚えている。

以前戦つたことのある「魔王の分身」は、人外の姿になることでその力が増していた。そしてそれを、直感することができた。

「ルフィ！ 何ぼうつとしとんのや！？」

「へ？」

ダルに声をかけられ、慌てて私は大きく後ろに飛び退る。

「後ろに飛ぶ癖、直しといった方が良いかも…」

何てことを思いつつ、私は今まで自分のいた場所に目を向ける。ちょうど、私の首のあつた辺りだらうか。「カンヅ」の爪が、横一文字に通り過ぎていたのは。

「うつわ…。」

ダルに声かけられなかつたら、今頃胴体と首が別々のパーティに！？いや、不死者だからしばらくくつつけとけば元に戻るけど！それでも痛いものは痛いし！ しばらくの間は確實に貧血で弱るし！

『ほほう？ よけましたね。』

楽しそうな声を上げて「カンヅ」は言ひ。

『不死者なのですから、避けずとも良かつたのでは？ ルフィ殿？』

「…敵の攻撃を喰らうのは、傭兵として…って言つた、剣士としての恥だわ。」

『なるほど。しかし…』

ゆつくりと、目の前の「カンヅ」が手を前に掲げる。

『この攻撃、かわせますか？』

性懲りもなく爪攻撃かっ！？

かと思いきや、奴の手の中に無数の光球が生まれ、奴を守るかのように展開した！

しかし光球の大きさは一個あたり親指の爪くらいのもの。防御の役に立つとは思えないほど隙だらけである。とは言つても、その数はハンパじやないんだけど。

「それのどこが攻撃だ！」

叫んだのは…ラギス。

…ああ、すっかり彼の存在忘れてた。

今までどこにあつたかは知らないが、彼の体躯にそぐわない大振りの剣をもつて、奴に斬りかかる。

いけるかと思つたその刹那。耳障りな音と共に、ラギスの体が大きく吹き飛んだ。

「な……っ？」

声をあげたのは誰だつただろうか。「カンヅ」は手をかざしたまま一切動いていない。

何が起きた？ ラギスは、曲がりなりにも竜族である。小柄な少年の姿をしているが、体重は竜の時と同じはず。それが、吹き飛ばされるなんて。

『何か、なさいましたか？』

再び嘲笑が聞こえる。

地の底から響くような声での嘲笑が。

…馬鹿にされるのって、結構ムカつくのよねえ。

「…ダル、奴の生み出した光球の正体、見当つく？」

「せやな…目えには見えへん何か…たぶん衝撃波やううけい、そう言つたもんを周囲に展開してるんやと思つわ。」

「光球はその『中核』って訳？」

「やと思うで。でないと、ラギス君が吹き飛ばされた理由が説明できひん。」

「僕も…そう思います。」

最後に感想を述べたのは、他でもないラギス。

所々服が破れてはいるが、大きな怪我はない。

「まあ、あくまで見た目は、なんだけど。

「派手に吹き飛ばされたものの、大した攻撃ではありませんでした。… ドラゴンである僕からすれば、ですが。」

なるほど。それはつまり、人間ならひとたまりもないって事ね。

「あのデビルを倒すには、その周囲の光球… というか衝撃波の壁をどないかせんとあかんつちゅー訳やな。」

「そう、なります。」

「…さて、どうするべきか。」

馬鹿にされっぱなしなのは癪だけど、打つ手が無いのもまた事実。ちょいと光球をこっちに向かわせれば、奴は手をかざした今まで私たちを倒すことができる。

それがわかっているのか、奴はこっちを見たまま、微動だにしない。…って言つても目とか無いから視線の先が定かじやないんだけど。

…でも…いくらデビルだからって、あんなふつにまつたく動かないモノか…？

そもそもあの黒卵顔が「カンヅ」だと思ったのは、奴自身が言ったからで…

つまり私の感じていた違和感の正体は…

「ラギス！光球に向かつて『竜の息吹』！ダルはその後に光球に神聖魔法ぶちかまして！」

「え、あ？ は、はい。」

「邪滅迅雷でええんやな？」

「十分！」

私の考えを知つてか知らずか。ダルが呪文を詠唱し始める。

同時に今まで余裕をかましていた「カンヅ」がうろたえた様な声をあげた。

『む、無駄だ！ その程度では…』

「無駄かどうかは、もうすぐわかるわ。」

私が言うのと、ラギスが砲えたのは同時だった。

ラギスの息吹は、光球の生み出す衝撃波にいくらか威力を弱められていたものの、大半の光球に命中。

「ああっ！ カンヅには当たらなかつた！」

少年の姿をした竜は悔しそうに声をあげるが、それはダルの放つた邪を滅すると言われる雷の音にかき消される。

雷も、竜の息吹同様に威力を減殺されてしまつたが、それでも光球を叩くには十分だつたらしい。

しかし光球は、それでもよろよろと「カンヅ」の周囲を飛び回っている。

「あかん！ 破壊でけへんかつた！」

「予想の範疇よ。というか、予想通り！」

言いながら、私は真つ直ぐ光球に向かつて剣を突き出す。ラギスとダルの攻撃が効いているのだらつ。光球の放つている衝撃波は、初めに比べてかなり弱つていて。

「その程度の衝撃、効かないわね！」

叫びながらいくつかの光球を一閃。

がぎ。ぎ、ぎ、ぎん。

剣の切先が光球に当たつた瞬間。

なんとも情けない音と共に、斬られた光球たちはその場で塵と化した。

『ぎああああああ』

相変わらず地の底から響くよつた声で、しかし今度は嘲笑ではなく悲鳴をあげる「カンヅ」。

「…え…？」

「本体には当たつてないのに？」

ダルとラギスが不思議そうな表情を作る。

まあ、気持ちはわかるような気がする。私としても、正直これは賭けだつたし。

「当たつたのよ、『本体』に。そうでしょう？ カンヅさん？」

言いつつも私は光球を斬り飛ばすことをやめない。

光球が斬られる度、カンヅの悲鳴があがる。

「これで…終わり！」

最後に残った光球を斬り…ついでに手を掲げたポーズのまま動かない黒卵顔も縦一文字に斬る。

全ての光球は塵と化し。

黒卵も煙のように焼き消えた。

…」これが、ある王国を危機に陥れた悪魔の…あまりにもあつけない最期であった。

最終章・再び、旅路にて

「そうですか、カンヅ叔父上が…」

事の顛末を殿下に報告した後。彼の発した第一声はそれだつた。同時にその話を聞いていたダッシャーさんは、あまりの出来事に声も出ないのか、それとも理解が追いつかないのか、呆然としている。

「わかりました。それで、この王宮の危機は去つたのですね？」

「ええ、そう思われます。」

カンヅが仲間を呼ばなかつた時点でのそらくこの王宮内にはもうデビルや悪魔はないだらうという結論になつた。ダルの言葉の後、しばらくは沈黙が続き…やがて、殿下が口を開いた。

「わかりました。それで、今回の報酬の件なのですが。」

よし来た今後の生活費！

相手がデビルだった事を考へると、1000ゴルドはかたいわよね。

ちなみに、1000ゴルドと言えば普通に暮らすぶんには100年間はお金に困らないくらいだと思つてくれればそれでよし。

100カツーで1シル、100シルで1ゴルドという金銭単位は、ここでは常識的なことなんだけど。

「今回の戦いにおける王宮の損害を差し引くと…100ゴルドと言つた所でしょうか。」

…

な…？

「ちよつ！そんな！」

「これでもかなり譲歩しているんですけど？」不満でも？ルフィーさん？何でしたら今後の魔道士長不在による損害額を差し引いても…」「ここにここにここにこ。」

……すみません」めんなさいこれ以上差し引かないでもう贅沢言いません。

「どうやら、商談成立、という事ですね。」

「いやかに言う事か！それが！」

悔しいけど…まあ、無駄な浪費をしない国王になれるってことだけは、確かみたいね…。

「ルフィさん。」

「ん？」

おずおずと、ラギスが尋ねてくる。

「何での戦いのとき、『デビルの本体』があの光球だつて気付いたんですか？」

「あ、それは僕も聞きたかったんだ。僕にもわからなかつたのに…」

「勘。」

もうつた報酬でエッセントーイ名物、シフの塩焼きを飲み下し、私は一人の問いかけに端的に答える。

「勘つて…」

「まあ、あの黒卵が最初以外全く動かなかつたつて言うのと、殺氣があの光球から出てきてたつて事も理由よね。」

「何だ、きちんとした理由が…」

「後付の理由だけど。」

最後の一 口を飲み込んで、ぽかんとしている2人を見る。

…戦つて いる最中にそんな理由を考えられるわけないじゃない。結局戦場で最後にものを言つるのは戦士としての勘よ。

……つて…

「何でラギスがここにいるの？」

「あ、僕ですか？ツール様に、この世界の様子を教えてくれと言われたもので。ですから、しばらくの間、お一人どご一緒にしたいのですが。」

「いいよ、一緒に来ても。ルフィも、いいよな？」

「それは別に……あ、でも旅費は自分で稼いでよー!?」

「はい。」

「いやかに、少年の姿の黄金竜はうなずいた。

……つて言つたか……ラギス、多分それクビつて事なんじや……?

とは口には出さず。

かくして、私とダルの他に、ラギスという、これまた個性的なメンバーが旅の仲間に加わったのだつた。

今回は不死者とは全く関係なかつたけど……次こそは必ず!私とダルがこんな体になつた理由を見つけ……られたらしいなあ……。

最終章・再び、旅路にて（後書き）

これにて、「General and Priest」第2弾、「蒼衣の神官」は終了です。

ここまでご覧頂き、誠にありがとうございます。

ルフイ、ダル、そしてラギスの3人は、今後どのような展開を迎えるのか。

というかそもそも展開なんてあるのか？

そう言ったことを含め、次回執筆の機会があればやらせて頂きたいと思います。

それでは。ご意見、ご要望お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7238a/>

蒼衣の神官

2010年10月8日13時53分発行